

ちょっと意外な酒類の統計、あまり知られていない統計データを、ビジュアルな資料で紹介するコーナー。当社で蓄積しているデータを不定期連載でお届けします。
 今回は「お酒のパッケージの分析」をご紹介します。

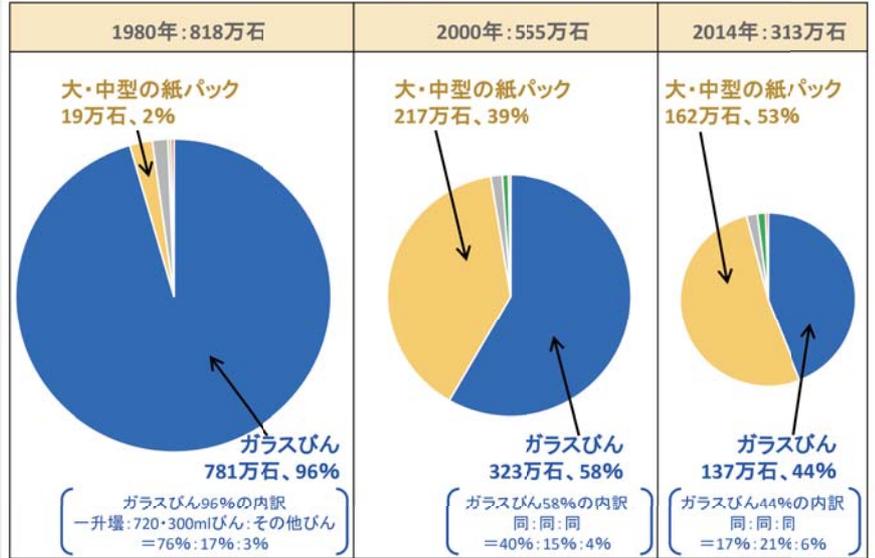
- 1980年には清酒の**96%がガラスびん**でした。清酒の最高出荷は1976年の980万石。1980年は出荷量が減少し始めた頃。なんとか対策したいという気持ちが、新しいパッケージ（紙パック）の採用を促した大きな要因でした。
- 2000年には清酒の**ガラスびんは58%**に低下。紙パックが39%をしめます。清酒紙パックは経済酒が中心となり、1.8リットルではなく、2リットルや3リットルの増量パックが定着。2005年以降2010年までのどこかの年で清酒の紙パック比率は50%を超えました。
- 2014年現在、紙パックが53%（もっと高い数字の資料もあります）、**ガラスびんが44%**と推定。これまでの推移を見ると、「紙パック比率の増加（≒経済酒比率の増加）」と「清酒の出荷量の減少」には、大きな因果関係があると思います。
- カッコ書きで、【一升壺】：【720や300mlの中・小びん】：【カップびんなどその他のびん】の推定比率を付記しています。わずか**35年前**、**清酒の76%が一升壺**だった時代があったなどとは、今では信じられません。

- ビールは推移ではなく、すべて2014年のデータ。大手の「ビール+発泡酒+第三のビール」でみると、缶が71.6%と圧倒的。**ガラスびんは9.2%**しかありません。
- 大手の「ビールのみ」に限ると、**ガラスびんが18.2%**に倍増。そもそも、発泡酒や第三のビールにはガラスびん製品がほとんどありません。**キリンやサントリーがプレミアムビールの新製品で積極的にガラスびんを採用**していますが、今後の動向が注目されます。
- 「地ビール・地発泡酒」の正確な公表統計はないのですが、2014年の生産量は推定2万6,000KLくらい。（国税庁の「地ビール等製造業の概況・平成25年度」では、ビール1万8,568+発泡酒2,496=合計2万1,064KL。）容器比率の推定値は、缶が35%、**ガラスびんが27%**。アメリカやオーストラリアのクラフトビールでは圧倒的にガラスびんですが、日本ではクラフトでもすでに缶が主流になっています。クラフトビールの市場では今後、びん・缶とも増加が見込まれますが、缶の伸び率のほうが高いと予測しています。
- なお、日本初の（世界初かもしれません）地ビールの缶は、1996年に当社からエチゴビールにご採用いただきました。当社が製造していた「お燗機能つき清酒アルミ缶」を流用した、東洋製罐製のアルミ製3ピース缶でした。

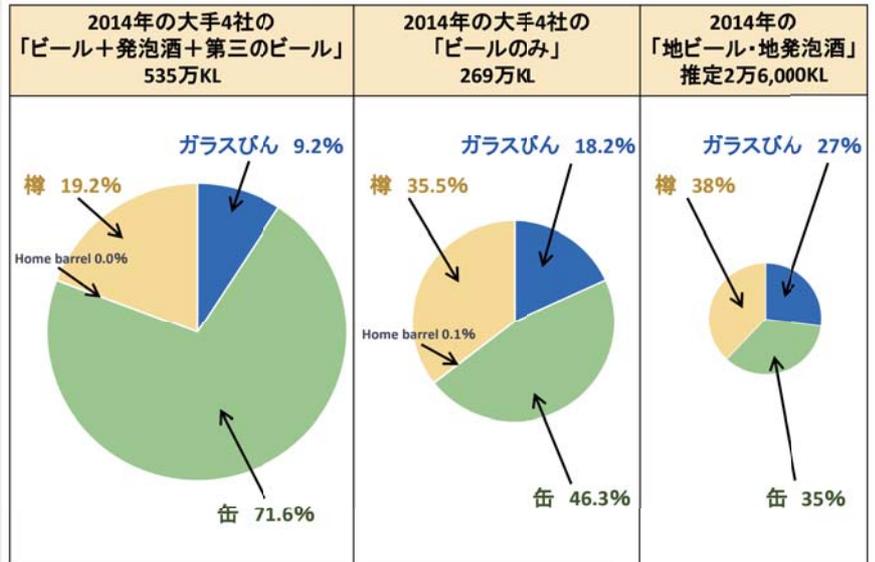
- ワインは、**ガラスびんが65%**と主流、ただ、大手のパッケージ戦略で急速にPETボトル比率が増えました。この資料では14%としていますが、もっと高い比率であるとするデータもあります。大和製罐のボトル缶の採用も相当増加していて2%となっています。海外の、テトラパックのワイン容器の動向などを見ていると、カートンも今後増える可能性があり、ワイン市場は拡大している事もあると、パッケージ激戦区となりそうです。
- 国産ブドウで作った「日本ワイン」の公表数量はないのですが、1万2,000KL程度（地ビールの半分以下!）と推定。（前号「酒うつわ研究」のお酒スタティスティクス参照）日本ワインは**ほぼ100%がガラスびん入り**でしょう。「プレミアムの商品にはガラスびん」という構図がもっとも濃く残っているのは、ワインです。
- ガラスびんは重たいし、昔からの回収びんシステムもうまく機能しなくなりつつありますが、全体として縮小する日本の酒類産業には、**ガラスびん比率を増やす（≒プレミアム製品比率を増やす）戦略が必要**ではないかと思えます。

(text = t. kita)

清酒パッケージの変遷、1980→2000→2014



ビールのパッケージ@2014



ワインのパッケージ@2014

